WASON
HQ
1104
J74+

Jun. 1894
no. 383

女學雜誌

明治十八年初刊

毎週土曜日發兌

第三百八十三號

要目

國民の大抱負

萎微として振はず縮退して消えんとす維新の元氣何處にある革新の使命何處にある慷慨禁せず少さか邦家の爲に論ず

透谷君を弔ふ

噫透谷君逝けり。若し之を言はんとせば千語万言も尙ほ慊たらず寧ろ默して獨り想ふに若かずとせしが哀情安んぜず玆に追弔す

南洲先生遺訓

幾回之を讀むも回々尙ほ鮮新なり堂々正々の高教凜として人を活かす惰夫尙ほ起たん

外國傳道の論

日本基督敎會近く大會を開かんとす吾に一事あり言はざる可らず外國傳道の事これ也外國とは支那朝鮮印度を云ふ。此の三國に傳道するものは實に吾か日本基督敎會ならざる可らず

明治二十七年六月九日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百八十三號目録

社説
國民の大抱負
日本基督教會の大會
朝鮮東學黨
上奏案通過したり

講壇
方今學校組織の缺點(上)
學校なるものは
學校は仙人境となり
學校に德育行はれずと今更驚くは
文部省は彌よ德育問題に困却すべし

文しらべ
西郷南洲翁遺訓(二)

小説
橋松佳話(花圃女史)
第四回ゆきあひの橋 中の二

史傳
養蠶家丹沼ふか子小傳 其二 藤井淡洲

論説
嬰兒の精神及び其發達(其四) 竹内楠三
(五)遺傳的感情
(い)恐怖の感情
(ろ)怒の感情

放言小話
無駄話
風流の定義
遅速長短の平均
人に擧めらるゝは晩學にしくはなし

書架
髯の自休
心の闇
一婦人の基督教
方今の政鑑
基督もし東京に來りしならば
盲詩人

雜録
透谷北村君を弔ふ

片々
歐米に於ける婦人の高等教育
月花の弄と國文教育

時報
國頭地方の女子教育○女生と速記術○東北女子實業傳習所○女子高等師範學校生徒の補欠募集○女子教育と淑德○華族女學校の幼稚園○吉祥女學校○秋田縣の學齡兒童○大坂福島貧民學校の近況◎孝女飯野とり子○貞女豐永くら子○三浦さい子○貞女川口はま子○孝女きくの◎アンドル及ブシユテル女史○叙任及辭令

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第三百八十三號
明治二十七年六月九日發兌

社説

國民の大抱負

吾に立塲を許せ、槓杆を用ひて全世界を動かさんと。天、吾國民に立塲を許與せり、現代に於ける其が使命、爛として旦陽の明るきよりも明らかなり。同胞、何に誘われてか、敢て逡巡として疑がふ。何んぞ断然としてすみやかに决行せざるや。

立憲政躰の初代に騒がしきとあるを奇しむとなかれ。これ万事開始の常態にあらずや。風俗少しく亂れ、制裁やゝ緩んだるに、落心するとなかれ。これ、維新過渡の推移に免かれがたき現象にあらずや、教育普ねからずと云ふか、我國民の如く文學の普及せしは、歐米各國に比類なき所ろなり。兵備、足らずと云ふか、士族四十万、父子兄弟倘ほ存す、一旦緩急に臨まば、百万の精兵立どころに雲集せん、抑そも何國の兵力を怖れんとする乎。嗚呼、尤とも怖るべきは、恐怖の念これ也、巨大の敵は、自から疑がふと是れ也。建國二千六百年君臣万代一系たり、此の如き歴史、如此き團結、如此き一大家、そも／＼天下の何處にかある。上帝、斯の國民に、優渥なる恩寵と、至大の職任とを賦與せらる。同胞、何に惑ひてか、敢て狐疑として彷徨よふ。何んぞ、猛然として、早く决行せざるや。

眼を放てば、亞細亞洲、茫々として廣し。故國、巨木なきにあらねど、文明極めて稚かし。支那、何れの日にか目覺むる。印度、何れの日にか獨立する。朝鮮の危ふきこと、累卵の如し。安南は、佛に降り、緬甸は、英に合わさる。暹羅は、それ如何の生存をなすか。試ろみに、馬來半島、阿富汗、ベルチスタン、波斯、亞拉比亞と列擧し來れ。何れか、慷慨の種にして、はた憫泣の媒ならざるべき。日本帝國、此の先進と

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

此の文明とを以てす、何んぞ早く誘導救護の任を盡さずして可なるや。

維新革命の大精神は、單に幕府の執政を解いて、五港を開き玉へるのみにはあらず、三百諸侯を王臣とし、六十餘州を王土とし、三千五百万人を王民とし、帝政温として仁あり、民權順として威あり、此の一大帝國、固結して天下の一大勢力となり、開擴、五大洲に交わり、宇内列國の間に突出し、以て建國以來の積威を善用せんとするにありしと、明白ならずや。然るに、此の大精神は、明治四五年にして、既に衰ろへ、爾來、縮減して、いよ〳〵振はず、明治二十三年、其の期望の大半を形成したるも、精神は畏縮して毫も發揚せず、日本海の波は万馬の嘶なくが如く、旭東の日旗は、朝な〳〵翩飜たれども、國民の軍氣未だ起たざるものは何ぞや。

嗚呼、是れ他なし、國民、その大抱負を落したるが爲のみ。兄弟、内に鬩めぎ、家族、互ひに爭そひ、議會の騷動と、内閣の變易とのみを無上の大事となし、毫も海外列國の形勢に着目せず。偶たま、愛國を談ずれば、鎖國的の團結を以てやうやく此を振起し、偶たま條約勵行を論ずれば、攘夷的の勇氣を以て辛うじて之を遂行せんとす。嗚呼、博愛の大氣宇を以て吾國を愛し、天下を一統するの公同心を以て吾國を警醒し、世界の大進歩に日本帝國の天稟を義捐するの大抱負なきか。西洋人何ものぞ、碧眼紅毛の人類にあらずや、彼等、憫れむべし、彼等友とすべし、彼等別段の英雄にあらねば、又、左したる怪物にもあらず、何を苦んでか事々しく之を別格に扱はんとするか。單に消極的の意義を以て條約を勵行し攘夷的の覺悟を以て初めて内地雜居を許すべしなど揚言するに至つては、狹小歎くに足れり。日本人民は、小國民にあらず。亞細亞全洲の盟首なり、先覺なり。何を苦しみてか、自から地位を貶して、局促たる細抱負の中に跼らんとする乎。自から省りみて之を恥づ。天に對して之を恥づ。嗚呼、何んぞ上帝の恩寵を蔑ろにすべけんや。

以上の大抱負を以て、單に丈夫が事とのみ認たむると勿れ。丈夫、外に大事を成さんとせば、佳人、内を助くる所ろなくんばある可らず。庖厨を儉まやかにし、閨房を潔よくし、彼の丈夫をして、内顧の憂ひあらしむると勿れ。況んや、日東の婦人、單に米國來の女丈夫が遊說にのみ謹聽すると勿れ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

印度、支那、朝鮮の婦人等、皆な無上の束縛を受けて、暗黒内に苦吟しつゝあり。此等を救導し、此等を教化するは、日本女丈夫が使命にあらずや。

日本基督教會の大會

來る七月、日本基督教會の大會ありと云へり。大會そも〳〵何事を爲さんとする乎。基督教の傳道とは、精神界の傳道に重きを置くものにあらずや。今や、邦民、精神に於て萎微として振はざる也。之を振作し、之を革新するは、豈に精神界の傳道者が責任にあらずや。左らば、精神界の傳道者たるものが、先づ大ひに振作し、先づ大ひに革新すべきは言ふ迄もなし、日本基督教會の名を冠むりたる大抱負を懷けるの傳道者大會は、抑そも何事を成さんとする乎。

聞くならく、教會内、多少の分裂ありと。あらば、何んぞ先づ断然として、之を整のへざる。もし整ふること能はずんば、何んぞ断然として之を立ち切らざるや。大敵、前にあり。今は區々として内に爭そひ、區々として内に拘つらふべきの時にあらず。

吾黨が、熱望に堪へざる所ろのものは、日本基督教會が、大ひに外國布教に從事せんと、これ也。ことに、朝鮮、印度、支那の三國に向けて、盛かんに外國傳道の道を開かんとこれ也。惟ふに、此の三國は、日本傳道者の手を假るにあらずんば、決して教路の開通することあるまじ。見よ、鋭敏なること、我國民の如く、適用に長ずること我國民の如くなるも、尚ほ以て英米佛の宣教師が、自國流そのまゝの傳道に感心せざるや久し。然るを況んや、彼輩にして、佛教の本國たり、儒教の祖國たる三國に渡りて、そも〳〵何事をか能くせんや。

今に方りては、佛教の行はるゝこと、印度よりも日本に多し。儒道の正統を承くる者、支那朝鮮よりも、日本に於てす。日本は、實に儒佛の精髓を吸ひ、而も之を我物にしたり。此國にして、亦た基督教を受入れたり、而も、よく三教を調和せしめ、美くしく其本眞を發揮せしめたり。此國の此の教徒にして、初めて能く、三國に傳道することを得べし。印度、朝鮮、支那は、日本傳道者の手を假るにあらざれば、決して宏邪

を闘らくと能はざる也。

今や、英米佛の諸教會、競ふて我國に傳道資金を輸入せり。然れども、日本が久しく彼等の傳道地となるとは、甘んずべきにあらず。況んや、實際の形勢たる、日本内地の傳道は、もはや必らずしも彼等外國人を要せざるに至れるをや。彼等もし好意あらば、其資金を轉じて、日本人が三國傳道に從事するの傳道用に義捐すべし。

日本基督教會は、金錢に富まんよりも、精神に富むべし。これ信徒少なき初代の基督教會に於ては、免かれがたきの事なりとす。此の教會にして、外國傳道に從事するとき、其の義捐金を外國人の好意に要むるとも、必らずしも恥辱に非ず。日本基督教會は、傳道師を彼の三國に派遣すると、其傳道資金を募集し、整理し、管督するとに責を負ふべし。而して、此の資金は、先づ本邦基督教會内に於て募集するのみならず、次に從來本邦傳道の爲めに、義捐せられたる資金を彼地に轉用せしむるとに盡力し、更に新たに之が爲めに諸外國に向つて盛んに募集すべし。

吾黨は、日本人が外國に渡りて日本の爲めに傳道資金を募集

するの辭柄そも〱如何なるやを問及ばず。されど、所詮、吾國の病所短所を公言して、同情を外國人に要むるにあるや、必せり。これ豈に國を重んずるものゝ忍ぶ所ろならんや。如此き辯士は、今后、印度、支那、朝鮮の爲めに、盛んに演説すべき也。外國の爲めに義捐金を募集す、壯快比類なし、吾黨は其辯の奔馬飛泉の如くならんとを羨やむ。

嗚呼、日本は、もはや傳道せらるべきの國にあらず、當に傳道すべきの國なり。歷史は稱す、ハワイ島民は、六十年前、人肉を食ひたりと。されど彼等一朝基督教を奉じてより、乍ち外國布教の抱負あり、即はち資金若干をもたらして、日本横濱の有志に義捐す。横濱の海岸に屹立せる大會堂あり、海岸教會と號す。海岸教會は、日本に於ける新教々會堂の最初の建築なり。而して、此の建築は、彼の人肉を食ひたるハワイ島民の義捐金に基いすと知らずや。

嗚呼、日東のクリスチアン、何んぞ恥なきとを得んや。日本基督教會の大會たるものは、もはや遲疑固息すべきの時機にはあらざる也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

朝鮮東學黨

朝鮮に於て、尤とも注目すべきは東學黨なり。もし內部より大革新ありとせば、即はち此の黨ならんとは、吾黨が固く信ぜし所ろなりき。果然、彼等は、兵を揚げたり。金玉均虐殺せられ、人心や、動搖し、租稅將に上納せられんとして、未だ國庫に入らざるの好機會を睨んで、旗を揚げたり。

吾國、容易すく兵を起すべからず。然れども、善隣の條約あるあり、もし其用あらば、瞬速に軍を出さゞる可らず。別に天津條約のあるあり、支那もし約に反かば、直ちに責めずんばある可らず。今や、軍機陰々、尤とも警戒を要す。機會は、寸步を誤まる可らず。國權は、分厘も墜すべからず。善隣先導の使命は、毫末も遺すべからざる也。

上奏案通過せり

上奏案通過したり。伊藤總理大臣は。御命を待てり。玉簾の內、何如に　勅語あらせ玉ふか。恭察し奉るもかしこし。嗚呼、御心のほど、恭察し奉るも、かしこし。

講壇

方今學校組織の缺點（上）

仙台高等中學校內忠愛倶樂部の爲に演說したる大意

今の學校組織は、日本に於て順序を履んで發達せしものにあらず。西洋に眞似て俄然移し植えたる急激の製造物なり。會社組織も、銀行組織も、政治及び社會上の組織も、大抵此の通弊は免れず。悲しひ哉、學校なるものも亦た同じ運命にあへり。新日本の農學者は、主も亞米利加の眞似をしたるが、亞米利加のアグリカルチウア（農業）は我が農業にあらず、寧ろ野藝なり、亞米利加のホルチカルチウア（園藝）こそ、即はち我國の農業ならんに、アグリカルチウの字義に拘泥して、又た其儘の眞似をなし、過大の大仕掛を試みて、多くは失敗したり。學校組織の兎角成功せぬも、多少此邊の意味なり。

學校なるものは

秩序ある敎育を受けし敎師が多くなり、其集合が能く調和す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るやうになり、社會の組織が完全して秩序的の智識を要求するやうになり、家庭又は私塾の教育が行屆かずなりたる頃に初めて成立すべきものなり。もし此に先だつて成立すとも、餘り調和完全したる組織を要めず、大抵の不調子に止め置きて、追々に發達せしむべきものなり。かゝる時代には、變則的の教育が、寧ろ正則的の教育とはなるものなり。然るに、文部省の發起として、一圖に西洋風に眞似ね、只管ら完全組織を要めて、學校なるものを起し、學校は全能にして教育之にて申す分なしと思ひたり。諸君此學校の内に學び居らる。先づ、其の缺典なるものに注意せずば、悟覺の道開くるとなし。凡そ、かゝる不順序なる發達を遂げて不自然に成長したる學校に於ては、勢ほひ二つの弊害を生ずべし。第一には、學問、死すべし。第二には、德育行れじ。抑そも、社會の發達に伴なひて出來たる學校にあらざれば、其教育が自然に社會と隔離するは、當然の事なりされば、

學校は仙人境となり

飛離れたる高尚空漠の道理を研究して、我ひとり學者と心得餘程羽を生やして世の中に出づるとなれども、世の中とは大したる懸隔を為すを以て實用の益とはならず、遂に其學問は死したるものとなる也。但し、用ひがたきによつて死したるものとなる耳にはあらず、實用の活智を得ざるによりて死したるものとなり、所詮、其學問は眞の學問とはならぬものなり。此一事は暫らく措き、第二、德育なるものは迚も行はるべからず。西洋には、學校の外に、家庭と教會とありて德育を掌どり、學校は專ぱら智育を旨とす。故に西洋風の學校組織と云へば、先づ智育にのみ偏するが當然の結果なり。然るに。

學校は德育行はれずと今更驚ろくは

馬鹿らしき事なり。かつや、我國目今の如き移り行きの時代には、家庭の感化なるものは、至つて弱きもの也。小供が學校で、世界が廻るのだと教へられるに、爺は、お天堂さまが歩るひて、お月さまとお合ひなさるのだと言ふ如き時代では、家庭の威嚴なるものは勢力なき也。オヤヂはオヤヂ、親は經驗もあり、覺悟もあり、中々子供輩の及ぶべき所にあらねど、子供はたゞ智識を以て上下を評するものゆへ、今日に方つては、兎角に親を馬鹿にするの弊あり、之が移り行きの

時代には免れがたし。斯の如く、家庭の勢力もうすく、又、教會も弱ければ、德育の行はれる場所がなき也。學校に於ても、勢力ある校長さへあらば、其人の感化は固より行はるべけれど、之は個人としての感化にして、學校組織より發する德育にはあらず。學校は、到底、十分の德育の出來ぬ所ろ也。文部省は、年來、此の德育に苦心し、色々に方法を變へらるれども、到底無效の事なり。

文部省は彌々德育問題に困却すべし

困却するが、當然の事なり。扨て、諸君は、斯る當然の結果あるべき學校なるものに勉學せらるる以上は、先以て學校の缺典を心得、豫かじめ之を補ふの覺悟なかるべからず。學校で學び居れば万事大丈夫、全能無上の効益ありなどと妄信せらるれば、恐るべき弊害を受けらるるであらふ。文學にせよ、法學にせよ、醫學にせよ、何れも一科一部分の學問なり。一科一部分の事に執着しながら、完全の發達を望むべきか。諸君、たゞ此等の事にのみ局促して、別に其缺典を補ふとなくば、遂に片環となつて了るは無論の結果ならん。左れば、方今の學校に學ぶ學生は、玆に於て德育は行はれぬもの、人間としての完全なる教育は行はれぬものと悟り、自から注意して補欠填充するの覺悟なかるべからず。

文しらべ

西郷南洲翁遺訓　（二）

（十一）。文明とは道の普く行はるゝを賛稱せる言にして宮室の壯嚴衣服の美麗外觀の浮華を言ふには非す世人の唱ふる所ろ何が文明やら何が野蠻やら些とも分らぬぞ予嘗て或人と議論せしと有り西洋は野蠻ぢやと云ひしかば否な文明ぢやと爭ふ否な否な野蠻ぢやと疊みかけしに何とて夫れ程に申すにやと推せしゆへ實に文明ならば未開の國に對しなば慈愛を本とし懇々説諭して開明に導く可きに左は無くして未開朦昧の國に對する程むごく殘忍の事を致し己れを利するは野蠻ぢやと申せしかば其人口を莟めて言無かりきとて笑はれける。

（十二）。西洋の刑法は專ら懲戒を主として苛酷を戒め人を善良に導くに注意深し故に囚獄中の罪人をも如何にも緩るやか

にして鑒誡となる可き書籍を與へ事に因りては親族朋友の面會をも許すと聞けり尤も聖人の刑を設けられしも忠孝仁愛の心より鰥寡孤獨を愍み人の罪に陷いるを恤ひ給ひしは深けれ共實地手の屆きたる今の西洋の如く有しにや書籍の上には見へ渡らず實に文明ぢやと感ずる也。

（十三）。租税を薄くして民を裕にするは即ち國力を養成する也故に國家多端にして財用の足らざるを苦むとも租税の定制を確守し上を損して下を虐たげぬもの也能く古今の事迹を見よ道の明かならざる世にして財用の不足を苦む時は必す曲知小慧の俗吏を用ひ巧みに聚斂して一時の缺乏に給するを理財に長せる良臣となし手段を以て苛酷に民を虐たげるゆへ人民は苦惱に堪へ兼ね聚斂を逃れんと自然譎詐狡猾に趨き上下互に欺き官民敵讐となり終に分崩離析に至るにあらずや。

（十四）。會計出納は制度の由て立つ所ろ百般の事業皆な是より生し經綸中の樞要なれば愼ますはならぬ也其大體を申さば入るを量りて出るを制するの外更に他の術數無し一歲の入るを以て百般の制限を定め會計を總理する者身を以て制を守り定制を超過せしむ可からず否らずして時勢に制せられ制限を慢にし出るを見て入るを計りなば民の膏血を絞るの外有る間敷也然らば假令事業は一旦進歩する如く見ゆる共國力疲弊して濟救す可からず。

（十五）。常備の兵數も亦會計の制限に由る決して無根の虛勢を張る可からず兵氣を鼓舞して精兵を仕立なば兵數は寡くとも折衝禦侮共に事缺く間敷也。

（十六）。節義廉恥を失ひて國を維持するの道決して有らず西洋各國同然なり上に立つ者下に臨て利を爭ひ義を忘るゝ時は下皆な之に倣ひ人心忽ち財利に趨り卑吝の情日々長し節義廉恥の志操を失ひ父子兄弟の間も錢財を爭ひ相ひ讐視するに至る也此の如く成り行かば何を以て國家を維持す可きぞ德川氏は將士の猛き心を殺ぎて世を治めしか共今は昔時戰國の猛士より猶一層猛き心を振ひ起さすは萬國對峙は成る間敷也普佛の戰佛國三十万の兵三ヶ月の糧食有て降伏せしは餘り算盤に精しき故なりとて笑われき。

（十七）。正道を踏み國を以て斃るゝの精神無くは外國交際は全かる可らず彼の強大に畏縮し圓滑を主として曲けて彼の意に順從する時は輕侮を招き好親却て破れ終に彼の制を受るに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

至らん。
(十八)。談國事に及びし時慨然として申されけるは國の凌辱せらるゝに當りては縱令國を以て斃るゝ共正道を踐み義を盡すは政府の本務也然るに平日金穀理財の事を議するを聞けば如何なる英雄豪傑かと見ゆれとも血の出る事に臨めば頭を一處に集め唯目前の苟安を謀るのみ戰の一字を恐れ政府の本務を墜しなば商法支配所と申す者にて更に政府には非さる也。
(十九)。古より君臣共に己れを足れりとする世に治功の上りたるはあらず自分を足れりとせざるより下々の言を聽き入るゝもの也己れを足れりとすれば人己れの非を言へば忽ち怒るゆへ賢人君子は之を助けぬなり。
(二十)。何程制度方法を論する共其人に非ざれば行はれ難し人有て後方法の行はるゝものなれば人は第一の寳にして己れ其人に成るの心懸け肝要なり。
(二十一)。道は天地自然の道なるゆへ講學の道は敬天愛人を目的とし身を修むるに克己を以て終始せよ己れに克つの極功は毋意毋必毋固毋我と云へり總じて人は己れに克つを以て成り自ら愛するを以て敗るゝぞ能く古今の人物を見よ事業を創起する人其事大抵十に七八迄は能く成し得れとも殘り二ツを終り迄成し得る人の希れなるは始は能く己れを愼み事をも敬する故功も立ち名も顯はるゝなり、巧立ち名顯るゝに隨ひいつしか自ら愛する心起り恐懼戒愼の意弛み驕矜の氣漸く長し其成し得たる事業を負み苟も我か事を仕遂んとてまづき仕事に陷いり終に敗るゝものにて皆な自ら招く也故に己れに克ちて睹ず聞かざる所に戒愼するもの也。
(二十二)。己れに克つに事々物々時に臨みて克つ樣にては克ち得られぬなり兼て氣像を以て克ち居れよと也。
(二十三)。學に志す者規模を宏大にせずは有る可からず去りとて唯此ことのみ偏倚すれば或は身を修するに疎に成り行くゆへ終始己れに克ちて身を修する也規模を宏大にして己れに克ち男子は人を容れ人に容れられては濟まぬものと思へよと古語を書て授けらる。

恢宏其志氣者人之患莫大乎自私自吝安於卑俗而不以古人自期

古人を期するの意を請問せしに堯舜を以て手本とし孔夫子を敎師とせよとぞ。

小說

橋松佳話

花園女史

第四回

ゆきあひの橋（中の二）

そなたの前にてかくいはんは面ぶせなれど、かの風の靜りし後、ウエブがかしくれたる金にて小さき丸木船を打たて、母島山手の開墾地のさま見たさにかしこにわたりしに、わが建おきし小屋は破れて跡かたなければ、かの獨乙人のかたに止宿して、畑地恢復の目論見などしゝおりから、ゆくりなくも又カナカ婦人の一人とわりなき契を結びにき、いつしか獨乙人の耳に入りて、妬さにわれを殺さんとせしを漸にのがれてかへり來りし折柄、またバルク形の帆船入港して其船長にて荷主を兼たりといへるは、米人にて名をハースと名乘りて、上海より横濱へ行く序なりとてウエブは方に上陸しけり、眼つぶらに顔赤く褐色なる頭の髮はちゞれ上りて鬚ひげなく肥肉なる四十前後の大の男、一くせあるべきつら魂なるも、其言葉のしとやかにやさしげなる、海かせぎするものとは見えず、ウエブとはいかにはなしの合たるにや、平生にも似ず、かのビール樽の底はたきて貯おきし金殘らず此島より南の方ラトローチン群島の內にて材木をきり出し、支那へ賣込べき會社取建るためなりとてかれにわたしぬ、ウエブはもと船大工あがりなれば、材木の切かた、船材にすべきやうの寸法尺度、手ころあればとて一は株主、一は工夫の監督として、彼地へ行べしとそゝのかされて、ウエブも年の寄るまゝに貨殖の念、益增長せしにや多年はなれざりし其妻をのこしてかの船に乘込、その島に赴きぬ、いくほどもなくかのハースはウエブの平安を其妻に報じ、又彼地商業のさまなど予に報告せる書狀など齎して、其船とともに歸り來ぬ、この度は此島の海龜の甲鳳梨檳榔なんど積荷として、横濱へ赴くべしと其支度の爲に、母島にも往來して、其身は多くウエブの留守宅を止宿とせり、ウエブの妻はカナカの種にして、色くろけれど鼻も低からず、口も大きからず、眼に愛嬌ありて年はまだ三十にはたらずこゝらあたりには稀なる美人と彼は其家に止宿しては、折に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ふれ、かの妻にたはむれくるふさま、我目に入りしも少からず、さてはウエブを遠く退けしも心ありてか、にくしと心におもへども、われあづかるべきならねば其まゝに打過しに一日かれ母島より歸り來て何人にきゝけん、わが母島にて獨乙人に襲れしと志りて、おのが母島にてかの男とたゝかひて、その女子どもも皆船にひき上來り、おのれはわが爲に仇を報たりなんとほこりかに打かたりていつにても船に來られよ、あはせまゐらさんと云て高聲に打笑ひぬ、もとより一時の興に乘せしことて深き情あるにあらねばそのまゝに打すておきしに、此夕ぐれハースはウエブの妻をつれて、その家財衣服などもかきさらひて、其船へ打乘ぬ、われは夕汐に小艜の上るを、措もてつきとらんと、飯臺山の麓の瀬戸に徘徊し居たりしが、しかと見とめて、ござんなれウエブは果してあざむかれたり、ウエブはわれに於て好友なり、恩人なり、その留守のこと、こま〴〵かき送りたる此頃の書狀の中にも、妻のせわ頼むとのむねあれども、妻むかひとらんとの事はなし、されはかれと妻との間には、たとへ納得づくにもせよ、わが目にふれては、そのまゝになしおかれず、且ハースの所業は疑しき事共多く、海賊なりとの噂さへあるほどなれば、猶の事見のがしては義理すまずと、矢庭に積置に引あげある、クヌーに打乘、一人かの船にのりつけ、見れば、われよりさきにまた一艘のクヌーありて、その乘手ははや甲板に上りたりと覺しく、いひのゝしる聲す、われもさてあるべきならず、やそらはしごを登りてをどり入れば、かの母島の獨乙人、かたへにあり合はしけの擢ふりあげて、ハース目がけて打かゝるを、へだつる船子ども二三人、そこに打倒して飛でかゝれば、ハースも畢生の力をもて同く擢にふせぎゐたり、ウエブが妻はいかにと見れは、かの母島より來れりと見えてわが契し女とそのつれの三四人と片蔭にかたまりゐて打なくのみ、われはかれらの喧嘩に頓着すべきに非ざれば、いそぎその方にはしりよらんとする折しも、一發の砲聲に顧れば、ハースは胸のあたり、かの獨乙人に打れのけそつたり、獨乙人はそのまゝにかの女のあるかた見がけて來るをさはさせじと争ふ船子、また二三人を銃殺して、近寄るまゝはたとわれと出あひて怒の聲するどく、おのれよくもハースと計りてわが女子どもを奪ひしなと、又も取上るピストルを、拳をかためて一打に打おとし、己

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

れはハースの同類ならぬをいひわけせんとするをもきかず、怒れるまゝ又取上るかたへの丸太、まつかうにかざして打おろすを、空を打せ、勢あまつて前にのめる獨乙人を、はづみに乘じて打倒し、其上に跨りておしふせたれば、いまゝて逃散たるハースの手下ども、得たりと牛切庖丁など持出て、わたりをかこみたり、われもと獨乙人に襲はれたる恨みなきにあらねど、そはわれにもひけ道あり、生命もて爭ふべき敵ならず、それとはかはりハースこそはわが友の妻をぬすめり、わが友の財をかすめり。

かゝるわるものゝ手下のものに、此人を殺させんは本意ならずこゝろまどへばおのづから、おさへたる手もゆるみけん、獨乙人ははねかへして、再び手に持つ丸太取上げ再又われ目かけて打かゝるをさゝえんとするミッセスウエブをうしろ足に蹴飛して打むかふに心得たりと、その丸太のはしとつて、うばひとらんとすまへばかれも、とられじとあらそふ、わが力やまさりけん、一引ぐつと引ちからに、獨乙人は手をはなしよろ〳〵と前にかたむくと見しまゝに、すぐ眞甲にかざしておのれ一打と打おろす、早くもかれは身をかわして後ろにまはりわがそびらよりくまんとす、さしつたりと取直してうしろ手に丸太もて拂へばキャッと聲して倒れしは、獨乙人とはおもひの外、ミッセスウエブ片頬打たれて血は滿面にそゝぎたり、われはもとより、さすがの獨乙人も、志ばし茫然たりしが、猶も屈せず大手をひろげてむしやぶりつく、われはおもふことのくひちがひて、友人の妻さへあやめたり、此上によし相手に勝にもせよ、無益の殺生はこのましからず、くむ手をふりほどきて、身を逃れんとあせる時かれは又も、かの丸太をひろひあげて、めつた打に打かゝる、を帆檣を盾として暫しさゝゆる折から、やつとかくる聲もろとも、そこに倒るる獨乙人、いつしかハースの手下にうしろよりあばら骨かけつき透されし牛刀にはやくも息は絶たりけり、われはおもはぬ助けを得て當の敵の倒れしかば直にウエブが妻のもとにより見るに憐や早くもこときれぬ、ハースの手の者はわれとは日頃志れるもの多し、ましてや、かゝる場合には理も非もなし、たゞ腕力の世界なり、かれが鬼ともおそれし獨乙人といどみておそれぬ、われの勇氣に恐れ服して一同わが前に立ちて、この後をいかゞせんといふ、もとより無政府の此島なれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

どむかしより大事は在住人一同の會議に任すべき約定あり日本役人の引拂ふ時も、再び役人の來るまでは、島の事は萬事相談して取扱ふへしといひ渡しもありき、されど今までさしたる事なくすみたるに、今日の變はこのまゝにはすまじがたし、本村大村すべての住人に、告志らして、その裁判にしたがふべしといへば、一同も承知して、されば船中はこのまゝにしてその人々の撿覗をうくべしと一兩人ははしけに乘りて陸地にゆきぬ、

史傳

養蠶家丹治ふか子小傳

（其二）

在福島縣　藤井淡游

梅吉氏曾つて村民の戶長に撰擧せられたりと雖ども、養蠶業は畢生の事業と誓ひし以來、全幅の精神を擧て之れが改進の道を圖るの際、村吏たるを屑ぎよしとせず、辭すると再三、

然して其絆逃るべからず、玆に於て一旦其職に就きけるが、蠶業の衰狀目前に迫り觀過するに忍ひず、斷然意を決して之れを辭し再たび該業に專盡するとはなれり。之れ亦た女史が諷刺直諫日に數々なるより。氏をして斷然斯に至らしめたりと傳ふ。亦以て夫婦志の存する所を知るに足るべし。

女史が內助により、梅吉氏が斯業に於ける熟練の結果として、名譽を博したるもの多し。明治十年內國勸業博覽會に於て、生糸龍紋賞牌を賜はり。同十二年橫濱共進會に於て生糸一等賞金百圓を賜はり。同十三年宮城縣共進會に於て生糸繭共に一等賞を賜はり。同十四年內國勸業博覽會に於て生糸有功一等賞牌を賜はり。同十五年群馬縣外六縣共進會に於て繭一等賞を賜はる。斯の如き賞譽を得るもの必竟夫人が蠶業獨特の長技にして、夫人は梅吉氏の金冠と云ふも過稱にあらず、亦傳習生徒二千人に對し何れも叮嚀懇切に得たる秘訣を傳えて間然する所なし、又養蠶日誌を印刷し各府縣篤志者に頒布せられたるが如き盡力周到を極めたり。

而して梅吉氏一朝病を得て、明治十七年五月十九日終に歿せらる。時に齡四十二歲なりき。遠近擧つて之を悼惜せざるは

なし。同年十一月櫬を送る、儀状嚴肅齊然たり。會送するもの數千人。縣廳は其遺功を追錄して、祭祀料若干を下賜せられ、東京上野共進會より追賞金若干を贈らる。氏か友人、八島佐野氏等も又氏が功勞を表彰なさんか爲め、碑を福島公園地に建設せられたりと。噫氏の爲人たるや、敢て學文に深きと云ふにあらす、亦卓見奇拔と云ふにあらざるも、義に勇み身命を惜ます、眞とに俠氣の人なり。抑そも、海外に輸出する本邦生糸の粗製にして、歲々其聲價を墜落しつゝあるに際し、是れを鋭意改正せしもの實に佐野組の力なりと雖ども、亦以て氏の奔走盡力が之に預りて大なるを知る。此他氏の逸事甚だ多しと雖ども、一々謄錄せず。福島縣は養蠶大家軒を竝べ、每年各府縣より許多の傳習生徒笈を負て遊學すれども、其日數僅かに七八旬に過ぎざれば、師弟の情誼自から冷淡なり。然るに、獨り丹治氏夫婦の親切懇篤なる、一度氏の門に入るもの永く其恩誼を忘るゝとなし。梅吉氏の永眠を聞くや、傳習生徒等愁悼措く能はず、氏の爲め義金を募集し墓石を建設せり。亦以て氏が後進を愛育せし一斑を知るに足るべし。

女史は良人歿後一層鋭意奮勵し、單身万般の事務に當りて、曾つて澁滯せしめしとなし。殊に女史が事業上に於ける德義は常に人の嘆賞して措かさる所なり。女史は蠶業を以て營利の事となさす、只管純良種を精撰して世に其益を布くを以て旨とせらる。故に丹治氏が蠶種を求むるもの、年々万に越ゆれども女史は僅々六百枚を以て制限とせり、每年謝絶せらるゝもの万に達す。若し營業的の事業家にして、斯の如き多數の需用者に應ぜば、莫大の利潤を得べけん。又蠶種一枚の時價通常一圓內外なるも、獨り女史の蠶種に至りては、二三圓の高價なるに、猶ほ爭ふで之を購求する也。又女史は、蠶種の多種類を造らず、故に純良精粹の蠶種を得べきや知るべきなり。女史嘗て曰く、凡そ蠶種なる者は他人の經濟の資料に供すべきものなれば、之が製造を苟且に附するは妾が良心の許す所にあらすと。去れば、女史の家法大蠶を主とせず、女史が手の及ぶ限りを以て度となし、曾つて情實の下に左右せらるゝとなし。是れ今日の聲譽を博したる所因にして、衆望の屬する所茲にあり。

第三百七十九號見出す條の記、上州中川は上越中川の誤也。

論説

嬰兒の精神及び其發達（其四）

竹内楠三

（五）遺傳的感情

感情——土地、氣候、空氣等の如き天然の境遇及び家族、友人等の如き社會的境遇は、吾人を刺戟して種々なる感情を起さしむ。而して是等の感情は其の激因となる事物の異なるに從ひて、多少其の性質及び度量を異にするものなり。例へば同じく天然の境遇が與ふる感情と雖ども、高山峻岳に向ふときに起る感情と、花に對し、月を眺めて起す感情とは、自ら其の性質を異にし、又た暴風を恐るゝ感情と、氣候の變化より生ずる感情とは自ら異なるなり。又た同じく社會的境遇より來る感情と雖ども、親に對して起る感情と、友人に對して發する感情とは自ら相異し、權威を恐るゝ塲合と他人に對して耻づる塲合とは自ら異なるものなり。斯の如く吾人が日々、其の境遇によりて受くる感情は、千種万別なるものなるが、心理學者は是等の感情互ひの、類似に基きて分類を立て、漸次進みて、遂に二個の相反せる概念の下に、一切の感情を總括して二類となせり。抑も二個の概念とは何ぞや。「快き」と「快からず」との相反せる二性質即ち是れなり。是等の二性質は感情の本性にして、凡そ感情と名づくべきものは、如何なる種類のものたるを問はず、必ず快きか或は快からぬか、何れかその一に居らざるべからず。是れサリー氏が「感情とは快或は不快なる、識の狀態を云ふ」といへる所以なり。然りと雖ども、快或は不快とは、種々異類の感情か、具ふる類似の點を指定したる、抽象的名稱に外ならずして、實際、識に現はるゝものは花に對するときの美の感とか、琴の音によりて起る樂みとか、或は疾病の苦みとか、友人に別かるゝときの悲みとかの如き、各々特殊の感情なることを忘るべからず。而して快或は不快の識は、各々別種のものなるや、將た刺戟の度量如何によりて、快ともなり、又た不快ともなるものなるやと云ふに、之れ學者の説を異にする點にして、ラッド氏の如きは、快と不快とを、各々積極的のものとなし、ヴント氏の如きは之れに反して、刺戟の度量如何によりて快ともなり、又た不快ともなるものとなせり、余は後者の説を以て正當なりと信ず。蓋し一定の刺戟あり識に現はれて感覺となるや、其の始めは未だ快にも非ず、又た不快にもあらざるヴント氏の所謂中性的のものなり。然るに、其の刺戟益々增加して、或點に達するまでは、漸々快となり、尙ほ刺戟增加して、一定の度を越ゆるときは、何時となく變じて、漸々不快となる、更らに一層の刺戟の度を增すときは、神經は遂に感應力を失ふに至るものとす。されば通常感情と稱するは、感應力が快及び不快の識を現はす程度を指すものにして、固より感覺、觀念などと精密に區別し得べき、一種の現象にあらざるなり。然り而して吾人が日常、經驗する快樂或は苦痛の中には、甚だ複雜なる美妙の感情、道義的感情、宗敎的感情などの如きものありと雖ども、是等も其の起源に溯れば、光線、熱、壓力、生理的狀態等の如き、單一なる刺戟の度量によりて、起りたる簡單なる感情、種々相結合して腦中に潛伏したる結果に外ならず。凡て感情は主觀的の方面より見るときは、上述の如く快或は不快の識なりと雖ども、客觀的に見るときは、腦の組織内に蓄積せられたる位置のエチルギーが、運動のエチルギーとなりて現はるゝものなれば、他の感情を惹き起し或は之れを沈壓し、又た筋肉を收縮せしむる仕事をなし得る力たるなり。故に人をして活動せしむるものは全く感情にし

て、行爲の方向を定め、品位の高下を表はすものは、腦中に起る感情の種類及び多少に關するものと云はざるべからず。されば嬰兒の時期より、或種類の感情を益々發達せしめ、又た或種類の感情を壓抑し、以て一定の理想に適合せしむるは、教育の主眼なりとす

種々異類の感情中、一は經驗によりて生ずるものと、一は、腦の組織の發達と共に一定の性質を具へ居りて、外界の刺戟に應じて發動するものとあり。后者を稱して遺傳的感情と名づく。遺傳に關しては、彼の有名なるヴァイスマン氏の新説、一たび世に現はれし以來、ダーウ井ン派の學者とヴァイスマン派の學者との間に種々の議論ありて、未だ何れが能く事實に適合するものや確定せざるものゝ如し。然りと雖ども假令新説の如く、生物が一代の經驗に於て得たる變化は、其子孫に傳はらずとするも、一種類の生物が己れに特有なる性質を代々遺傳することは明白なる事實たるなり、而して人類にありても一般に一種の傾向、腦の組織中に代々遺傳せられ、一定の時期に達すれば、外界の刺戟により、感情となりて發動するものゝ如し、斯る傾向は其の始め如何にして、生じたるものなるやを其の原始に溯りて穿鑿せんとせば、必ず先づ下等動物の性質を研究せざるべからず。之れ動物心理學上の問題にして實に困難なる研究なり。而して吾人今日の知識にては、斯る變化の起りし源は未だ明白ならずと雖ども、想ふに代々之れを遺傳して動物の進化と共に、益々發達し來りたる所以は、蓋し自然陶汰の影響によるものならん。即ち斯る傾向は、其動物の生存に必要なりしを以て、之れを有するものは生存することを得、之れを有せざるものは生存することを得ざるにより、最初、或る事情によりて、之れを得たるものゝ子孫のみ生き殘りて、己れと同樣なる子孫を蕃殖せしめたるものなるべし。斯くの如く代々其の腦中に傾向を傳へ、生后之れを生ずるに足るだけの、複雜なる經驗を待たずして、嬰兒期に於て早く發現するものは、如何なる感情なるや、又た是等の感情が人類進化の上に如何なる關係を有せしや、又た將來の社會に適合せん爲めには、嬰兒期に於て如何なる制裁を與へざるべからざるや、等の問題につき、聊か次下に述べんと欲す、

（い）　恐怖の感情

吾人は或る事物によりて、自ら苦痛を經驗するか、或は他人の苦痛を受けしことを見聞するときは、將來その事物を恐怖するに至るものなりと雖ども、斯る經驗を待たずして、發する恐怖の情あり。例へば嬰兒が暗黑なる場所、電光、動物或は見馴れざる人を恐るゝ如き是れなり。嬰兒は未だ是等のものによりて危害を蒙りしこと一回だもなしと雖ども、漸く之れを識別するに至れば、何となく恐怖すると云ふ一種の感情を發するものなるは、世人の能く知るところなり。而して恐怖の情は、最も早く發現するものなるが如し。佛國の心理學者プレー氏は恐怖の顯然たる表現は、胎兒に於てすら、母の急激なる恐駭によりて、起ることあるべしと云ひ、遂に一の事實を記して曰く「一姙婦分娩の三ヶ月前に當り、非常なる駭に遇ひし時、胎内の嬰兒が急激的運動をなせしことを感じたり。然るに分娩の后嬰兒は僅かに三ヶ月生存せしのみなるが、その生存中、外界に何の原因もなきに、屢々非常なる恐怖を表はすところの激動を爲せるは、必ずや生前に於て感じたる、恐怖の結果なるべし」と。されば姙婦は須く是等のことに注意するを要す。又た初生兒は、不意の音響、目に觸るゝ種々の物體によりて、いたく恐怖するものなるが、是等は殆ど人の注意を惹かざる所のものなりと雖ども、その戰慄、叫喊、呼吸の停止或は急劇等の現象は、凡て恐怖の徴候たるを記すべきなり。プレー氏の記するところによれば、嬰兒は三ヶ月或はその以前に於ても、見馴れざる面貌を見るのみて、甚だしく恐駭し、殆ど窒息するが如き變動を、其の呼吸に及ぼすとあ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りと云ふ。又たダーウヰン氏は嬰兒が生后僅に數週間にして、極僅少なる不意の音響に恐れ、少しく時日を經て、馴れざる音響及び面貌を恐れたること及び尙ほ少しく成長したる嬰兒が、暗黑中にあるを恐れしことを目擊したりと云ふ、又た嬰兒は、己れの位置の危險たるを知るときは、大に恐るゝものなり。こは嬰兒を高き所に上ぐるとき、或は嬰兒が步行し始むるときに當りて、何人も目擊する所なるべし。又たダーウヰン氏が、己れの兒童につきて觀察したる如く、嬰兒は、大なる獸類を見て大に恐怖することあり。氏の說によれば之れ、吾人の遠祖が野蠻朦昧の狀態にありしとき、是等の動物より害を蒙りて、漸次大に恐怖する傾向を得たる結果なりとす。其の他、電光、雷鳴などの如き、凡て非常なる事物に遇ふときは、大に恐るゝものなり。而して嬰兒の恐怖する所と、野蠻人の恐怖する所とは、能く似たるものなるとは、既に明白なる事實たるが如し。野蠻人は高大なる山岳、電光、雷鳴、彗星、日月の蝕などを恐怖し、遂に之れを神となして拜するに至れり。是れ野蠻人の宗敎的觀念を硏究する者の親しく知る所なり。蓋し一個人の發達は全人類進化の經路を反復するものにして、其性質に至りては全く同一なるものなればなり。

斯くの如く、奇異なる現象或は危險なる事物に遇ひて、起る處の恐怖の感情が、全人類の發達に於ても、亦た一個人の發達に於ても、夙に發生して、最も強き動機となる所以は、其生存上に重要なる關係を有するに因る。若し夫れ斯る感情に乏しきものは、危險なる境遇を避くることなく、遂に不意の災害に遭遇して、其生命を失はざるを得ざるに至るや必せり。然りと雖ども漸々經驗を積み、知識の發達するに從ひ、以前には恐ろしきものなりと迷信して、甚だしく恐怖したるものも、其の實恐るゝに足らざるものなるとを知り、又た一方に於て實際危險なるものと雖ども、人類の知識增加し、能力發達するに至りては、容易に其危險を除去して、却て之れを己れの爲めに、利用し得るに至るものなれば、經驗の範圍の廣まると共に、恐怖の情は漸次減するものゝ如し。例へば嬰兒が成長するに從ひ、最初恐れし猫或は狗を弄びて樂むに至り、或は最初ハ母の手に助けられて立ち、その手を去らるゝときは恐れて泣きしも、少しく成長すれば、獨立して自由に步行し、以て樂むに至るなり。又た社會の發達について之れを考ふるも、未開の時代にありては、彗星或は日蝕の如きものは、その實恐るゝに足らざるを知り、又た以前は恐怖に堪へざりし電光を利用して、人類の幸福を增進するに至るものなり。然り而して、斯くの如く遺傳的に發動する恐怖の情の中には、多少將來の生活に、必要なるものなきにあらずと雖ども、その多分は不必要なるのみならず、却て兒童をして卑怯ならしむる所の有害物なり。蓋し其將來の生活に必要なるものは、重もに本能的恐怖にあらずして、生后の經驗によりて得たる新感情なりとす。例へば彗星、電光、鬼神などを恐怖するは何の益なしと雖も、有毒のベクテリアを恐るゝとは誠に必要なり。されば嬰兒敎育の任にあるものは、適當なる經驗を與へて、無益の本能的恐怖を消滅し、一方に於ては、剛氣活潑の兒童となし、他の一方に於ては、經驗上より、眞に恐るべきものを知らしめ、空漠たる迷信の源を除去して、確實なる知識と自信の基礎とを立てざるべからず。然らざれば兒童をして活潑なる人間となし、圓滿なる心情の發達をなさしむると能はざるなり。つらつら我邦の家庭を觀察するに、實に慨嘆に堪へざる者多し。其父母は、嬰兒に有害無益なる恐怖の情を、消滅するとを勉めざるのみか、却て兒童を壓抑せんが爲に、種々の恐ろしき者を設けて、益々恐怖の情を增

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

さしむるとあり。彼の種々の妖怪談を語り、之を記憶せしめて怪物、幽靈鬼神等の迷信を養ふ如き其一例なり。之れ實に嬰兒精神の發達に毒害を與ふる者なりと、謂はざる可らず。

（ろ）怒の感情

嬰兒の生后、數週間にありては、外物より受くる苦痛を表出する本能的形狀は、單に叫喊と抵抗の運動とに過ぎざるなり。然るに殆ど二ヶ月を經過するに至れば、己れが好まざる所の物を取去らんとし、皺面、赤面、戰慄或は流涕などによりて感情の表出をなす。三ヶ月に至れば、嬰兒は母の胸に至らんとして直に達する能はざるか、又た入浴或は衣服を着代ゆるとき、又たは己れの願望が、直ちに滿足されざるときなどに於て、甚だしき怒を起すものなり。又た六ヶ月に至れば、若し己れの弄具を取去らるるときは、怒の泣聲を發す、之れ蓋し物を所有せんとする本能に由るものなるか、或は其弄具が嬰兒に樂みを與ふるに由るものなるべし。而して此時期に至れば、睡眠中に身躰を動かし、或は聲を發して叫ぶとあり、これその苦しき夢を示すものなり。又た殆ど一年に達すれば、其の怒は他人を害せんとする動作によりて現はる、之れ即ち復讐の情の萌芽とも稱すべきものならん。而して嬰兒は己れを怒らしめたる人、動物或は器具を打ち、又た手に持てる所の弄具、食物、皿などを投げて其憤怒をはらすものなり、（以上は佛國プレー氏による）。又たプレー氏が自ら觀察したる事實を、其の著書中に記して曰く、「十一ヶ月の一小女、毎夜其母が臥床に入るゝ毎に、怒の情を發して止まざりし」と。又た「十五ヶ月の一男子、毎夕其母が臥床に入るゝ毎に、怒りて母を噛む習慣ありし」と。又た曰く、「三歳の一男子あり、其惡戯の爲めに食堂より逐出されしが、直ちに歸り來りて床上に横はり、其手足を投げ出し聲を限りに泣き叫びたり」と。斯の如き事實は、嬰兒をもてる人の、能く目擊する所なるべし。蓋し怒の情は、恐怖の情と同じく、嬰兒に在りては早く發現するものなり。

進化說を以て若し確實なりとするときは、一個人の發達は、必ず其遠祖が、原始の動物的狀態より進步して、漸次文明の域に入りたるまでの經路を、通過せざるべからず。即ち嬰兒は、吾人の遠祖たる原人の狀態を、再現するものと云ふべし。果して然りとせば怒り易きことは、劣等人種の特質なるを以て、嬰兒が怒り易き性を有するは、決して怪むべきにあらざるなり。彼「カムチャッカ」人の實に怒り易くして、些細の事柄にも狂氣の如くなり、遂に自殺するに至るが如き、亞弗利加の「パプアン」人が、性急にして激動し易きが如き、「フィヂアン」人が、感情の激動速かにして、且つ變じ易きが如き、又た「タスマニアン」人が、忽ち笑ひ、忽ち泣き變轉常なきが如き、是れ皆な嬰兒が心情の性質と、大に類似するものにあらずや。然り而して嬰兒が怒り易く、激し易き天性は、吾人の遠祖より傳へられたる、遺物なりと謂はざるべからず。

上述の如く、野蠻未開の人民が怒の情に強きは、一は其身躰の發達如何にもよるものなるべしと雖ども、又た一は彼等の生存と、密着なる關係を有するものにして、斯る劣等の境遇にありては、道義なく亦法律も未だ發達せざれば、互に他を害し、己れの慾望を充さんとするものゆゑ、之れに抵抗して運動せしむる原動力なかる可らず。而して此力は、憤怒の情を措て他にあらざるなり。斯の如く怒は彼等の生存を保護するに必要なりしを以て、既に早く發達して、一種の天性とはなりしなり。然りと雖も社會の組織、漸次複雜となるに及びては、屢々怒の情の勃興するとは、必要なきのみならず、却て人類の結合上大に害ある者にして、社會の進步を妨ぐると甚だ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

しければ、一方に於ては自然陶汰の作用と、他方に於ては、宗教、教育、又は法律などの人爲的制裁によりて益々減少せらるゝに至りたれば、社會の文化に進めば進むに從ひ、憤怒の傾向の衰ふるは、明かなる事實たるなり。而して今日の文明國に於ける如く、國家の組織定まり、社會の結合益々堅固となり平和的、實業的の時代となりたる上は、暴力を振て共に爭闘する必要なし、故に互に共力親和して、樂まざるべからず。されば憤怒の情は、將來の社會には實に有毒有害の動機にして、社會の進歩を妨げ、人類の幸福を損するものと云はざるを得ず。故に嬰兒期より、成る可く怒を發すべき境遇を避け、他人を怨み、他人を憎む如き傾向を滅して、他人と相愛し相結ぶ社交的習慣を養成せざるべからず。然るに之れを實行するに當り、尤も害となるべきものは、父母、或はその家族が、猥りに兒童を譴責し、兒童をして之れを恐怖し、或は之を怒り、之れを怨ましむるとなり。抑も父母は實に愛すべきものなりとの感情、嬰兒の心中に起るにあらざれば、如何にして社交的感情を發達せしむることを得んや。

又た怒の如き、恐怖の如き情の發動は、心臓の皷動、消化液の汾泌などに悪しき影響を及ぼし、全身の發育上に甚はだしき妨害を與ふるものなれば、若し屡々斯る境遇に嬰兒を置くときは、遂に其身躰不健、精神不活潑にして忍耐、剛毅の性に乏しき不完全なる少年となるべし。之れ父母たるものゝ特に注意せざるべからざる點なりと信ず。

放言小話（第二）

愛水

○無駄評

友どち打集ひて、日本新聞募集の歌の評をなせしとあり、一人の特撰歌十首は、數千首のうちより、玉の玉として撰ひ出でぬと、聞きけるにさて／＼異なるふしの見えぬことか那と云ひ出でしを、口さがなき一人そは特撰歌（徳川家）の衰へぬるにこそと諧謔一番せり、已れ傍より口さし添てさては景氣（慶喜）よろしからずと見ゆと云へば、誰彼も一時に腹打かゝへて吹き出しぬ、

○風流の定義

月明ろき夜、山手なる友が許を音れしに、折ふし鰯あふりて、酒飲みいたり、已れ酒は飲めずとて、只管鰯のみ打食ひしかば、顳顬腫上る迄に痛うなりぬ、友は盃數度傾けながら、縱談放論せり、さて云ひ出づらく世の酒客と云ふもの、もと酒と云ふことを解せず、酒は今宵の如き夜、かゝる下物にて飲むこそ、風流なれ、種々の佳肴ありとも、何かせんと云ふ、已れ減らず口きゝて、さては君か風流の定義と云ふは、顳顬痛うするとこそならんかと云へは、友も覺へず呆然失笑したり、

○遲速長短の平均

已れ朝寢の癖あり、父君嘗てそを戒め玉ひぬ、已れ竊にしかのたまへど、起き出づること晩きかはりに、夜寢ぬること早きにあらずやと、獨りごつを側聽せる人ありて、さては君は、無何有の鄕にさすらひ玉ふこと長しと見ゆと云ふ、已れ實に然り、去れど醒間我働く時間は、父君より短かきにあらずやと答へぬ、其人はかばかり氣樂なりとや、思ひけんいとおかし、

○人に譽めらるゝは晩學にしくはなし

父君は業務の繁きにかゝはらず、夕べ々々寢につき玉ふ前一時間ばかり、必ず英書を繙き玉ふこと、爰に四年一日の如し、人あり已れを詰りて曰く、老ひ玉へる父君尙かくの如し、年若き君の徒らに過し玉はんは、餘りに口惜しからずやと、已れ答へらく父君、今年五十の上五六つも越え玉ひぬ、去れば已れの英書に就かん迄には、尙三十年を餘せり、年若きもの丶、父君に競ひ率らんは、餘り無禮なる心地してなんと云ふ、此答も餘り氣樂ならずしもあらず、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

書架

○髯の自休

豪快なる俠客が心限り淸戀を凝むれば、如何に。浪六子、巧みに深見笠、后の髯重、髯の自休の三部に於て之を寫す。十七の少女、日本一の我儘者に連添ひ、全身を獻げて之に仕ふる所以のもの玆に神秘の訣なからんや。寺西閑心驚ろひて曰く、髯は何日の間に仕込みたるやと。髯即はち胸を叩ひて曰く、此にありと。實に此にあり。心血の溫たかき所ろ、佳人が生命を托するの所ろにあらずや。左れば、綾江をして若し最后一回の直諫なからしめば、彼女は只だ尋常の可憐娘のみ。左れど彼女は確かに大俠の妻たるに恥ぢず。亦た一身を獻げたる賢夫人の覺悟に恥ぢず。髯が一生一事の道理なき我儘を猶わんとする時、彼女は亦た一生一度の直諫を爲しぬ。妾が首を切つて、男の約束を解き、名なき騷わぎを止め玉へと諫む。綾江こゝに至つて貞女の一念を示す。彼等が戀愛こゝに至つて活動せり。

○心の闇

人間たゞ目に於て盲するのみならず、心に闇をさぐること幾千時ぞ。紅葉子、あわれなる盲人が戀をうつして坐ろに讀者を泣かしむ。雪に笛を吹ひて、深夜塀の外にたゝずめども、枕に近き喜一郎の顏を見て、嬉しさ、羞しさの身に染々たる佳人、何事も知らず。言はずして思ひ疑がひて懼る。戀か、心の闇か。人世、悲戀あること少なし。嗚呼、何ぞ佐之市の不憫なるや。

○一婦人の基督教

大和國添下郡々山町大字北郡山第百十四番屋敷の樋口忠子は、「基督教」と云へる一小冊子を著わす。吾黨故ありて之を覽ること晩かりしを憾む。僅々たる八頁の小冊子、而も鬱勃たる大精神を溢らす。婦人の著作にして斯の如きありしを、世に紹介することの晩かりしを謝す。序に曰く、此書素と樋口忠子氏、唯少しく基督教の主旨を某中學校學生諸氏に知らしめん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が爲めに稿を成したるものと。而して、本論の冒頭に云く、

我が大和民族固有の精神を益々發達せしめ至誠至烈以て永遠に我日本の榮光を四海に發射するには基督教に依らざるべからずと信じます我儕は憐れむべき我同胞を早く救はざる可らざるとを思ひ我國家の前途を思ふ時は恐れず憚からず基督教を主張します我儕は神學者に非ず傳道者に非ず唯だ草莽の一婦人として之を主張します

何ぞ其言の堂々として凛烈なるや。又曰く、

封建の道德とは、財產よりも何よりも廉耻を貴とび責任を重んずるとです、万事万端死を期して從事するとです。基督教の大趣旨は能く此精神を一致します、基督教は封建の道德を破碎するが爲めに來らず、之を成就し倚ほ一層完全なる美風を作らんが爲に來りました………竊かに思ひます基督教は我日本に於て最とも能く發達するを得んかと。

嗚呼、これ吾黨が熱賛して措かざる所ろの識見なり。

○方今の政鑑

若し内閣諸公に物を献ずべき折あらば、請ふ、羽陽叢書八冊と、樂翁公遺書三卷とを以てせん。就中、近來「國光」紙上に鈔錄せられつゝある樂翁公が遺事の如きは、朝野の政治家が、日夕誦讀ありたきもの也。

○基督もし東京に來りしならば

在米の一友、ウヰリアム、ステッドが近著を寄す。題して曰く、If christ come to Chicago!（基督もしシカゴに來らば如何ん）と。嗚呼、クリストもし東京に來りしならば如何ん。もし帝國議會に來りしならば如何ん。もし、吾家、吾事業、吾一心の内に來りしならば如何ん。これ眞とに戒しむべきの警問なり。

○盲詩人

政教社中の別天樓、殊にミルトンを擇びて其性行事跡を傳ふるもの、豈に閑日月のわざならんや。主人、ひそかに盲詩人に私淑する所ろのものあり、革命に際する此の自由の吟客を懷ふか、紙上單に意味なき賛傳を爲すものにあらず。

雜錄

故北村透谷君追悼會

戸川殘花、内田貢、星野愼之輔、小此木忠七郎の四氏並に吾社の巖本等發起し、故透谷君三週忌日たる去四日に於て、東京九段坂下玉川堂に追悼會を開く。肖像、壇上に存して宛然生けるが如し。細花數輪下に潔よく開く。別に、君が遺稿數十篇、並に其最とも愛好したる洋籍七八卷を置く。大人、未亡人、遺子、皆な臨席せらる。三時會を開き、追悼の式を行なひ、后ち各員互に君が逸事を懇話す。時に來會せし諸君姓名左の如し。

久野成七郎　島崎春樹　戸川明三　磯田剛橘　星野愼之輔
小此木忠七郎　福追亀太郎　犬養建之介　佐谷巳三郎　平田喜一
馬場勝彌　飯野かく　太田敬夫　田島良五郎　久野宗熙
加藤万治　志谷長三　近藤音次郎　大和田建樹　平島喜智次郎
増田たき　松井せつや　竹内うめ　松居眞玄　佐藤きゑ
竹越與三郎　吉田眞愼　石崎呂孝　星野男三郎　矣くみ
工藤達中　小此木文九郎　三浦泰一郎　山路彌吉　松村介石
藤戸くす　森田文藏　大塚敎昌　植村正久　田川大吉郎
坪内雄藏　巖本善治

透谷北村君を弔ふ

若し之を言はんとせば、千語万言を重ぬるとも、尙ほ慊たらず。寧ろ默して獨り想ふに若かずとすれど、亦以て心に安んずると能わざる也。

余が初めて紙上に君を認めたるは、君が楚囚之詩に於てなり。未見の知己として文雜の上に相識りたるは、君が報徳二宮先生を憶ふの祀に於てなり。初めて、相會し、初めて相ひ手を握りたるは、君が厭世詩人と女性の一大文章を搊さへたるの日に於てとす。今にして、之を憶へば、三の時は余が友情の爲に三大紀元の如し、而して三の文は、君が天才を想ふ余が爲の永遠の印刻たり。嗚呼、余、如何にして君を忘るると得んや。

純潔、君が如き幾人かある。眞實、君が如き幾人かある。義に勇み、友に篤き、君が如きもの抑そも幾人かある。余が最とも推服して措かざる所のものは、君が文學上の評論にあり。就中、思潮文流の脈勢を尋ね、情義美感の由來する所を講究するに至ては、君は眞とに天の爨發を賦與せられたり。「女學雜誌」は、一年半、此の天才を抱き、「評論」は、其の創意に由て生れ、其若彩に由て初めて色ありしに、今や忽焉として之れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を失なひたり。紙に靈なきにあらじ、彼等暗泣に堪へざらんとす。況んや交情余が如きものに於てをや。

君、慷慨義烈、夙に大志あり。初め身を政界に献げて革新の雄志勃々たりしに、中ごろ飜然として悟る所あり、更に精又を根本に入れんとし、初て全力を文學に集む。后ち又基督教を信ずるに臨んで、更めて直接傳道に意あり。屢ば此意を試みて未だ全力を伸すと能はず、終に友人太田氏を助けて某教會の基礎を置くとに熱盡せり。嘗て余に語りて曰はく、もし今回の事にして成らずんば、全く傳道の意を絶たんと。去年下半期憂患の事内外君に迫り、道學教義の疑、亦屢ば、君が鋭慧多感の靈覺を亂す。遂に病んで蓐に在ると半歳に超ゆ。君、輾轉反側、思を幽玄に凝め、精を極上に潜そむ。遂に直接傳道に全身を委ねんとするの意あり。嘗て病蓐に余を控へて曰く、二十世紀の詩星は寧ろヲヅヲルス、トルストイの類ならん、文學に於ける吾が立場も稍や變化せんとす、吾にして若し可なりとせば、將來大に傳道し傍ら文學の評論に從事せんと。余、則はち友人押川方義を其枕頭に伴ひ、大ひに將來の爲に約する所のものありき。而して君今や失せたり。

嗚呼、君が錦腸未だ十一を展べず。驚ろくべき結構、過半は腹裏に存して土中に入りぬ。君が理想の共和國は遂に未だ世に公けにせられざりき。君が戯曲「公曉」は、遂に未だ完璧を爲さゞりき。而して君が教會、君が傳道は、未だ着手せられずして了れり。嗚呼、天才、今や何處に逍遥遊す。楚囚を出でゝ蓬萊に遊び、美神に伴はれて下界を臨んとき、芙蓉の峯、彼處にあり、明治政府、彼處にあり、日本基督教界、彼處にあり。慷慨にして雄勁なる、纎細にして多血なる、眞實にして靈潔なる君が天才、今ま尙ほ現世の爲に思ひ、現世の爲に憂ひ、現世の爲に熱するとを爲すか。惟ふに否らず、天才今や、則はち逍遥として宇宙の樂趣と同化したり。

明治二十七年夏五月十五日、花散り葉著く、十三夜の月、公園樹林の枝間より漏れ、君が沈々たる病室の玻璃窓より射れり。君出でゝ坐を散じ、彷徨して思へば、月、天にあり、人影地にあり、万家遠く、籟聲絶す。嗚呼、天地、何んぞ幽邃にして、何んぞ美なるや。生死抑そも何ものぞ、去來抑そも何ものぞ。君は遂に美を追ふて美の天地に逝けり。

嗚呼吾が友は、其の將に逝かんと欲する所に逝けり。余、今ま思ふて之を追ひ、又安んじて玆に止まる。別離何んかあらん、只だ少間と、細形とあるのみ。君嘗て病床に余を抱いて曰く、此の友情は永遠の者たるとを確信すと。友情眞に永遠なり、余遂に君と離れんや。玆に君が靈を追ふて君が肉を吊ふ。友人巖本善治謹んで白す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

○歐米に於ける婦人の高等教育

佛蘭西　佛國の大學は初めて婦人の爲に其門を開きたるものにて實に是千八百六十三年なりとす。而して學位を受けたるものは「ソルボン」に於て、數學の學位を以て最初とす。其後英國婦人にして醫學博士の學位を得たるものありたり。千八百六十八年に、パリス醫科大學に於て四人の女生徒ありしが、千八百七十八年には三十二人、千八百八十六年には既に百十九人の多きに及びたり。法科に至りては全佛國中、唯パリスに於て三人の女生徒ありしのみ、

日耳曼　近頃迄プルシヤ大學に於ては婦人の聽講も試驗も許さゞりしが、千八百七十一年より千八百八十年の間に於てライプチヒ大學は婦人の隨意聽講を許可したり。其後此決議は廢せられたりしか、如何に口實を設くるとも獨乙の大學は、婦人をして大學の講義特に醫學を聽講せしめんとの輿論に抗しかたかりし、其時に已に或る大學に、五萬の婦人より聽講歎願の建白書を呈出したりと云ふ。

アウストリヤ及びイスパニヤ　此二國に於ては法律上婦人に高等教育を授くるを禁す。

白耳義　此國の婦人は法律を以て何の科を問はず聽講し、且學位を受くるを許されたり、醫者となるか如きは許可せられたれとも然れとも辯護士たるとは今日尙許されず。其は兎に角。白耳義に於ては大學女生徒及び學位を得たるものの多きにも拘らず、女子をして大學に豫備する所の中學校なきは不思議なるとなり。

大英國　イギリス及びアイルランドの大學は久しき以前より婦人の入學を許可したり。然れともスコツトランドの大學は今日迄許さゞりし。聖アンドリユス大學もエヂンブルグ大學も多少の爭論ありたりと云へ、結局婦人の入學を許可するとゝなりたり。英國の植民地に於ても醫學の修業は婦人に許可せられたり。假令マドラス。メリブルン。ドルヘム。シドチイ。ウエリントン。カリクト。カナダ等の大學に於て婦人の醫學修業を公許したり

和蘭土　玆にも大學女生徒の數甚た多し。

スウイツル　此共和國には大學女生徒の數甚た多し。玆には哲學にまれ、法學物理にまれ、婦人にして修むるもの少なからず、辯護士たらんとは玆にも亦禁せらる、

以太利　法律は婦人に何科を問はず入學するを許す、又代言人を除くの外何業に就くも禁せず。ボロン大學一人の貴婦教授職にあり。醫學を講す。

ルメニヤ　此にも亦婦人の大學に入るを許す。

スカンデナビヤ　一般に法律はデンマルクに於てもシュエチー、諾威に於ても、婦人の大學に入るをも學位を得るをも禁せすと雖然れとも公務に就くを許さず。

米國合衆國　此は至りて自由教育なれは婦人の大學に入學するを許さるゝは言ふまてもなし、加之、玆には二十三の合衆國皆婦人の代言人たるを許す且つ判事たるとをも許可せられたり、而して現今二千の女醫あり、三十の電氣學家あり。醫學校に教授するもの現今大凡九十五人あり、以上は是れルイ、フランクと云ふもの丶調査に係るものなり。（大日本教育新聞に據る）

○月花の弄と國文教育

今時の國語の教科書は、玆時の氣象を昭代に移すものにあらずやとて、井上文相左の如き旨を立つ、論し歸すべきものなり。

中古以來の草子ともに、みやびたるわざとして、むれともてはやすは、月雪花になむありける、こは御國のふるき習はしにもあらず、又唐國の古の手ふりにもあらず、中昔より始まれる風習にして、かの佛の道と倶に東漸し來れるなりけり、そないかにといふに、御國の古は文にも、歌にもあれ、物の麗はしき譬へには、玉なごこそひきいでつれ草木の花、又は月雪などになぞらへたるは見えず、唐國にては三百篇の古詩にも、梅の實を詠じ、唐棣の花と夢とを物にたとへ、桃の葉になぞらへたるためしこそあれもはら花をみやびやかなる趣むきに取れるはなし雪霜はさむくすさましきさまをこそいへ、白妙の清き心にはたくへず、月は畢てふ星にかゝりて雨のしるしをあらはせるとなどは見えたれども、憐れなるかたにいへるはなし。

天竺にては、月花をば領域にたとへ、花一枝もて傳道のしるしとしなど、經文に見えたり、又かの極樂淨土のありさまを語るにも、月花を清くたへなるとのきはみとはなせり、その天竺の心の唐國にうつろひしよりいつしか、御國にも傳はりて、月に嘯き花を弄ぶをばこよなきみやびとして、物のあはれを知るほどの人は、時につけ折にふれ打興するとはなりしなり、かの國には晉の世より佛法ひろごり行はれしにぞ、風月の弄びも、その時より始めて世に聞えたりし、そは文選といふ書を見て知りぬべし。

我國にて中古元氣の衰へたりし代に當り、佛法盛りに行はれ、四時の折にふれてともすれば、無常の觀に、月雪花の氣色にむかひては心ものどかならぬまでにうかれぬなど、京官貴紳の風雅の有樣にぞありける、其の比の草子の今に殘れるは、文こそ細かに妙なるやうなれ、我國上古の手振には似もよらず、彼の異國の六朝又は晩唐の纖巧ともいふべき調べにぞ流れたる、そを今の人の國語の教科書に用ゐて、玆時の氣象を昭代に移さむとするはいかにぞや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎學校、教育

●國頭地方の女子教育　國頭地方各尋常小學校に於ては去る明治廿二三年の頃始めて女生徒を募り居りたるが未だ女子教育の必要を感ぜざるにや漸次退校或は引き籠等にて昨年よりは名護尋常小學校を除くの外は殆んど女生徒あるを見ざりし程なり然るに過般勸誘の結果と見へ本學期よりは各校共亦々澤山の女生徒あるを見るに至れり目今の通りにて管理者及び教員諸子に於て勉めて怠らずんば該地方の女子教育亦繁盛なるに至るべしと琉球新聞に見ゆ

●女生と速記術　天秦園主人源網紀氏紀伊毎日新聞に書を寄せたる中に云はく歐米諸邦にては此學術は女子に適切なるものとして修めさせ米國裁判所の速記は大抵女速記者許りとの事に候、已に伊太利の如きは昨年より同國議會の議事は速記者の過半數女子速記者を採用する事に相成候由、嚢に主人は明治十九年の頃京都に在住致し候折柄米國禁酒會の副總理レビット婦人に面會致し當時の演説は屢々主人が速記致し新聞雜誌にも掲げ置き候が其時レビット婦人の申し候には全會の委員中多くは皆速記に巧にして常に其事業に從事する由申され候我國には古來男女七歳にして席を同ふせずと云ふ關門有之候故妙齡の男女共に同席するを許さゞれば前申通り言語の不取締り、さんだ行違の起り來る事有之故色々私も勘考致したれども此學術を學ぶ者さんと無之然るに京都に於て漸く此關門を打破り六名の女子を得て男子と共に授業致し候處通計八拾餘名の門生中殊に此六名の女子が優等の成績を得て卒業致し候樣の事に候へば速記術は女子に適するとの歐米人の言葉も我々を欺かざるを確認仕り候云々

●東北女子實業傳習所　同所にては去る二十九日卒業證書授與式を執行したる由卒業者は左の如し

山形縣　石山もよ　　同縣　石山さくえ

宮城縣　鈴木よしの

●女子高等師範學校生徒の補欠募集　女子高等師範學校生徒の定員は百名なれども現在の生徒九十名餘にて尚ほ數多の欠員あり近々補欠募集をなし來九月初旬同校に於て直接に入學試驗擧行の上入學を許す筈なりといふ

●女子教育と淑徳　某氏なるもの奥羽日々紙上に論して曰く女子の教育は長足の進歩を爲し來りしも之に伴ふて淑徳を欠くもの多きは正しく諸種の學科私塾中に修身齊家の科目なきによる假令之れありすとるも校内に於て教授されし修身の道は校門を出づると共に頭腦より飛逸し去る之れ今日の教員なるものは封建時代の先生の如き威信に乏しく專ら月謝束修に目を奐れ徒らに義務的の教授を爲して間接にも直接にも校外の擧動に注意せざるの致す所と謂はざるを得ず云々

●華族女學校の幼稚園　は已に先頃設立せられしが本年夏季中には校舍を新築するに決したりと

●吉祥女學校　函館なる同校は目下生徒四百名もあり現時校長代理は種田直右衛門氏司とり事務は蛯子安積氏專ら擔任し居り中々隆なる由

●秋田縣の學齡兒童　二十六年末學齡兒童の總數は男六萬六千九十七人女五萬七千百八十四人內修學者は男五萬四百七十八人女一萬二千五百七十八人なり前年に比較するときは男千五百十七人女三千百六十四人を增加せり學齡兒童百人中修學兒童男は七十六人強女は二十二人強の比例にして男女を通計して前年より三人六分九厘の增加なりと

●大坂福島貧民學校の近況　本校の校舍は梅田橋北詰にあり明治廿五年四月以來林可彥氏の熱心なる働きは其効空しからず創設以來幾多の困難辛勞を嘗め不撓不屈の精神は遂に今日の隆盛を見るに至れり今其概略を報ぜんに目下入學生徒續々增加し毎日十名以上の申込あり今日の處にては現在生徒百有餘名なれども尚絕へず入學申込ある由なれば随て校舍の狹隘を感ずる有樣にて當月限り入學申込を當分の中謝斷せざるを得ざる勢にて主任林可彥氏は專ら校舍新築の計畫に盡力せらる殊に同校生徒の感化よろしきは實に神の恩惠と吾人の感謝讃賞する所なり既に或る一人の生徒富田ツル(十六年)は至つて孝心者にて親は眼病に惱み稼業を働くこと能はざれば彼女は毎日紡績所に通ひ僅々なる賃銀を得て親を養ふの一助となし夜は必ず學校に妹イヲ(十二年)を伴ひ來り一心に勉强するさまげに殊勝とや云はんこのほども紡績所にて能く勤むる褒美にとて金貳拾錢ほど貰ひ來りしが已が身につく着物などは破れ縷れのものなるに何とも思はず直に學校に來り先生是れにて姿等姉妹の者の學ぶ書籍を買ひ得られますかと惜しげもなく差出すにぞかゝる純眞なる生徒のあるに由り教師も喜び生徒も勵み又世の人も大に感ずる有樣にて遂に今日の如く隆盛の域に達し尚將來續々入學志願者あるに至れり是れ偏に神祐の然らしむる所とは云へ又林氏の熱心なる働きに由るなるべし目下婦人にては堀しゆん婦力を盡し其外教授を助くる有志家も續々申出でらる由に聞く（福音の使者）

◎美談

●**孝女飯野トリ子**　は埼玉縣武藏國男衾郡本畠村飯野甚五郎養嗣にして資性温良克く養父兄に事へ明治十三年中養父關節病に罹り手足不隨と爲り尋て養兄亦同症を患ひ一家操業者なく益〻貧困に陷るも幼弱の身を以て父兄の看護に當り傍ら賃役を事とし或は紡績の業を營み漸く長ずるに及びて農作機業を勵み孝養倍〻努む其志操を變ぜざること玆に十數年に至る洵〻奇特の至りなりとて金圓を下賜せられたり

●**貞女豐永クラ子**　は肥前國北松浦郡志佐村士族豐永才十郎妻にして松瀨悅五郎の長女なり幼にして早く父に離れ母と倶に實家に復籍せしが後ち母は他に再嫁し其身は豐永家に嫁せり克く舅姑に仕へて怠らずたま〳〵姑は不治の病に罹り身体自由ならざるにぞクラは日夜床辺に侍し只管看護に心を碎くと玆に十有餘年篤志の善行一日の如し姑病死の後は舅に孝養を竭し貞操にして善く婦道を守り一家和順すと貞女なるかな

●**貞婦感泣す**　孝貞二道の厚きにより嚴に賞勳局より賞金若干を下賜せられたる石川縣の田中リテ女は爾來天恩の涯りなきに感泣し造かに東天を三拜し居ると云ふ

●**三浦サイ子**　は青森の人にて（四十七年）その昔當地第一の豪商三浦武助の娘にして生長の際には全家全盛の時なりければ箸を取るのが其日の役目と云ふ有樣にて遂めて榮華の生活をなしたりしが年頃に至りて藤田駒之助と云ふ人に嫁し夫婦和睦の間に四人の子を設け何不足と云ふこともなく暮し居る内不幸にも夫は永々の病氣にて臨終を遂げ實家も世の變遷に連れて今は昔の名殘を止めず殆んど困難の場合に陷りたれどもサイ女は艱難に逆ふて却て殊さなるの志操を現はし、委不幸にして今此非運に逢ふもの誠に困窮なりと雖ども是天命の止むを得ざる所なれば爾來は更に自助の精神を勵まざる可らずと益々貞操を固くし近傍の娘子達を集めて裁縫女禮等を親切に教訓し居ること玆に七年の久しきに及びしかば子女其德風に化して著るしく婚風の質を現はし近隣揃つて賞賛し居ると云ふ

●**貞女川口ヘマ子**　は相模國大住郡秦野町川口由太郎の妻にして資性純良舅姑に孝に して至孝夫に事へて貞順夫負債の爲め蹤跡を失ふに當り僅少の所得て辨償の資に充て窮困に陷ると雖も毫も屈撓せず自から耕耘に從事し舅の病に罹るや看護撫養懈らず舅沒し姑も又尋て老疾を發するに及び孝養倍力め傍ら子女を撫育し嬬婦の身を以て克く一家を保持すること玆に數年洵に奇特なりとて賞金一圓五十錢を下賜せられたり

●**孝女きくの**　仙臺市東六番町に借家し居る金須源之丞といへるは今より十五年前商業上の失敗にて非常の零落を來し妻子飢餓に瀕する有樣となりたるにぞ當時十歲になる長女きくのをば背に腹は換へ難しとて伊達郡の人買の手に渡し若干の身代金を得て當座の生活をなしけるがさてもきくのは伊達郡に行きて後稚心にも實家の貧苦を案し煩らひ如何にもして年期を勤め上げ早く故鄕に歸りて父母に逢はんものと一心に思ひつめて業の事や機織業を勉强し些の暇あれば神社佛閣に詣で父母の身の健康を祈り往々斷食する杯ありしと元來斯る雇人の常とて實家へ手紙の往復も可成避けさせらるゝ事故きくのは只管夢幻に父母を慕ひ居りしが光陰に關守なく十數年を經てきくのも成年に達し容色さへ十人並勝れたれば雇主は深く同人を愛し養女として相當の家へ縁づかすべしといと懇ろに勸むれどもきくのは一向聞入れず今年にて十五年の期限濟みたるゆゑ故鄕に歸らんと以前の住居へ郵便にて問合せたれど住所不明にて書狀は其儘戾り來りしにぞきくのは太く落膽せし折柄宮城郡岩切村の工女お何と懇意になり同人の家元を便りて搜索せんものと先月下旬一先つ岩切に至りお何の實兄を賴みて共々に當市役所に出頭し戶籍簿を探してヤッと住所丈判明し十五年振さて戀慕ひたる兩親に逢ひたれど源之丞夫婦は不相變極貧にて加之に八人の子供あり僅に菓物など賣りて生活し居るにぞきくのは伊達にて習ひ覺えし機業の手傳をなし追々は機織をもなす心得にて父母に孝養を盡し弟妹を慈愛み居るにぞ近所にては珍らしき孝女なりと譽め居る由東北新聞に據る

◎片々

●**アンドル及ブシュテルの兩女史**　は去る三日午後二時より婦人矯風會の催にて數寄屋橋會堂に於て一場の演說ありたり

●叙任及辭令

女子高等師範學校教授從六位　中川謙二郎

陞叙高等官九等

女子高等師範學校教授兼女子高等師範學校教授正七位　野口保興

陞叙高等官六等

女子高等師範學校教授正八位　武村千佐子

仝　仝　佐方鎭子

陞叙高等官八等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

賣捌所　文學雜誌社書店

- 文學第一集 基督教及佛教　全　定價金二拾錢　郵税金四錢
- 文學第二集 基督教及哲學　全　定價金廿五錢　郵税金四錢
- 文學第三集 基督教及社會　全　定價金拾五錢　郵税金四錢
- 松村介石著 立志の礎　全　定價金廿五錢　郵税金四錢
- 松村介石著 アブラハム 倫古龍　全　定價金廿五錢　郵税金四錢
- 松村介石著 基督の心　全　定價金拾二錢　郵税金二錢
- 松村介石著 保羅の傳　全　定價金三拾錢　郵税金六錢
- 松村介石著 デビニチ！　全　定價金拾五錢　郵税金二錢
- 小崎弘道著 政教新論　全　定價金廿五錢　郵税金四錢
- 小崎弘道著 基督教ト國家　全　定價金八錢　郵税金
- 内村鑑三著 求安錄　全　定價廿五錢　郵税金四錢
- 内村鑑三著 基督信徒の慰　全　定價金二十錢　郵税金四錢
- 内村鑑三著 コロムブスの功績　全　定價金拾六錢　郵税金四錢
- 内村鑑三著 貞操美談 路得記　全　定價金拾五錢　郵税金二錢

- 内村鑑三著 傳道の精神　全　定價金十五錢　郵税金四錢
- 星野光多編 立德堅信 談林　全　上製金五拾錢　並製金四拾錢　郵税金八錢
- 星野光多編 修德養信 思想の林　全　上製金五拾錢　並製金四十錢　郵税金八錢
- 星野光多編 聖語一覽　全　上製金四十錢　並製金三拾錢　郵税金六錢
- 平野滎著 基督評一班　全　定價金六錢　郵税金二錢
- 平野滎著 日曜學校の教へ方　全　定價金三錢　郵税金四錢
- 横井時雄譯 聖書の眞理摘要　一編 二編　一册　定價金八錢　郵税金二錢
- 横井時雄著 世界最のもの　全　定價金七錢　郵税金二錢
- 横井時雄譯 宗教上の革新　全　定實金八錢　郵税金二錢
- 横井時雄、原田助合著 天啓教と聖書　定價金十五錢　郵税金二錢
- 田中達著 日本の道徳と基督教　全　定價金八錢　郵税金二錢
- 田中達編 教界十傑　全　定價金二拾錢　郵税金四錢
- 植村正久、田中達合譯 家庭の友　全　定價金二拾錢　郵税金四錢
- 植村正久口譯 基督のすがた　全　定價金四十五錢　郵税金六錢
- 信仰の標準　全　定價金六錢　郵税金二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東京通信社
新聞切抜廣告

●切抜通信の要旨

●全國の新聞紙無慮百數十種日々掲載する所の事項千差萬別世人の必す知らざるへからさるもの擧て數ふへからす然れども全國の新聞紙を一集して盡く之を各自に通讀せんこと人事の繁多なる今日に在て容易に爲し得へきにあらす是本社の嘗て新聞切抜通信の業を創始し以て江湖必須の需めに應せんと欲する所以なり

●切抜通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小說廣告に至るまで其委托に應し精閱遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區釆女町廿壹番地
東京通信社附屬
新聞切抜通信部

明治廿七年六月

●切抜手數料大要

●一己の身上に止まる通信は壹ヶ月金貳拾錢とす
●一事業又は一事物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五十錢まで
●一會社又は一團體の全般に關する通信は壹ヶ月金五十錢より金壹圓まで
●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるべし
●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は拾件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす
●本社切抜通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

村木經策著

地久節

御肖像賀題御誕辰以來の御事歷韻文等を挿入したる極製美本にして皇后陛下御誕辰表賀の事を記したるの書也

定價金二十錢
郵税金四錢

東京神田區表神保町六番地

賣捌所 女學雑誌社書店

東京産科婦人科病院

東京神田區駿河臺袋町十三番地
（小松宮殿下邸前）

院長 醫學士 増田知正
●診察時間 午前七時ゟ十二時迄

副院長 水原漸
●診察時間 午後一時より四時迄

俳諧史傳 全

小此木信一郎
布川靜淵 同著

和裝美本
紙數三百二頁
定價三十錢
郵税四錢

『俳諧史傳』出でたり、それ俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す一句十七有言、尺幅の裡無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に與り、松永貞徳となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を漾蕩せしめ幽妙なる詩天地に逍遙す其源流に遡り、其發達を叙し、其推移を尋ね、其變遷を記し、其特想を論じ、細讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむとを期したるは我『俳諧史傳』なりこれを分てば、俳人個々の傳記となり、これを聯れは、整々一卷の史篇をなす、逸事あり、名句あり、一誦の下、恍々乎として、月明かに、花香しき境に遊ぶが如けむ、若しそれ、一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確凱切なるや否やは世自ら公論あらむ、世の文士、一本を座右に備へざるべからず、今や印刷成る、我『俳諧史傳』は好知己を待つ者也、

發行所 女學雑誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

毎月一回發兌

六月五日發兌

第二十五號目錄

博愛的愛國心の論

條約厲行論者に警告す

强兵の策豈錢を要せんや

議會の爲すと無き亦た一の國益なり

生死論

透谷北村君を弔ふ

願くは花下に死せん

慈善事業の進歩を望む（舊稿）北村門太郎

春の夕（河内、魚ぬの）

米國法庭の不法、同胞の屈辱（江東居士）

教育上方今の難問題

地理學考

爵の自休

自主的外交

「二百年後の吾人」を評し併せて

强者の權利の競爭及び道德法律の進歩に對する元良中島兩教授の批評を讀みて一二の所感を述ぶ（布川靜淵）

發賣所　女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らす

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事

一請取人は神田區表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。

一郵便切手代用は一割增（五厘切手に限る）にて申受候

本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事

東京市神田區表神保町六番地

發賣所　女學雜誌社書店

東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY